

sukhāvātī vyūhaḥ ||

易楽という近畿圏そのものとしてはいませるきわの

すなわち 嚴淨智一身

namaḥ sarva-jñāya ||

南無そのことが、

一切らの知幾これなるにたるきわにともおさせる御方のためとこそはいよかし！

evaṃ mayā śrutam | ekasmin samaye

bhagavān śrāvastyāṃ viharati sma |

是の如く、私自身によりてでもつかまつろうばかりとてはありもうさねばならなかったところが、これまた、上聞なりていることがらにこそなければなりませぬ。

はしなくもある時、世尊こそが、舍衛国 中原に於て、また、ご在遊あそばすのであった。

jeta-vane Snātha-piṇḍa-dasyārāme mahatā

bhikṣu-saṃghena sārḍham |

祇陀太子 [ジェートリ殿下] による苑遊に於ては、すなわち、無依怙たりけらし行乞団らの奉上なるにたりませる卿公ご一身のならまほしけれともありけるばかりにはあったところの、これ、歓喜園そのことに於てでもかたじけのうわたらさねばならぬばかりにはあったところでもありましたが、大いたりけらしとはおわせるきわの、これまた、乞士らという公衆ご自身によられましてでも、それ、同斉にまかりあらりょうばかりとこそおさせられたのでなければならぬ。

ardha-trayodaśabhir bhikṣu-śatair abhi-

jñātābhijñātaiḥ sthavirair mahā-śrāvaka-

aiḥ sarvair arhadbhiḥ | tad yayhā

sthavireṇa ca śāri-putreṇa |

また、諸々の、一半なりけらし者らが十三法たるべくはおらんきわにともいるおおみものごとども、すなわち、諸々の、乞士らが百事なりけりとはあったところとてあるおおみことがらどもによりては、これまた、諸々の、了解せられてある者らの明解なりている仁者たち一身らによりても、これ、かたじけのうくだしおかせんほどにとはわたらせたまうのもあったが、また、尊宿たりけらしとはおらんものごとどものことにもいましようところの、諸々の、大きな声聞客がたによりてでは、諸々の、一切ども、すなわち、諸々の、阿羅漢がたご一身らによりてもまかりおかせんほどにとはあそぼせるのもあった。

当然、上尊たらまほしとはおろうおおみことがらとしてもわたらせんきわのではあるけれども、これまた、舍利（シャーリ鳥）が孝子なりけらしとはおわさん御方によりてでもかたじけのうおかれんばかりにあらせられましようところではあることにもなる。

mahā-maudgalyāyanena ca mahā-kāśyapena  
ca mahā-kapṣiṇena ca

また、これ、大いたる莢豆義という歴路尊ご自身によりてであずかりあそぼるるわけではあるけれども。すなわち、大きな洪亀ご一身によりてこそ・これまた、大いたる宿疾ご自身によりて・ではあるけれどもである。

mahā-kātyāyanena ca mahā-kausthīlena  
ca revatena ca

また、大きな幾何義という路歴尊ご一身によりて、これ、あずかりおわしませるわけではあるけれども。すなわち、大いたる腹腔ご自身こそによりて・これまた、艶軀ご一身によりて・ではあるけれどもである。

śuddhi-panthakena ca nandena cānandena  
ca

また、これ、清浄儀という直径尊ご自身によりてであずかりあらるるわけではあるけれども。すなわち、悦意ご一身によりてこそ・これまた、娛悦ご自身によりて・ではあるけれどもである。

rāhulena ca gavāṃ patinā ca bhara-  
vājena ca

また、覆暗尊ご一身によりて、これ、あずかりあそばせるわけではあるけれども。すなわち、諸々の、天韻器牛たち自身のなるべかれとはいましようところの、当主ご一身によりてこそ・これまた、担荷しつつある駿足ご自身によりて・ではあるけれどもである。

kālodayinā ca vakkulena cāniruddhena  
ca |

また、時限智という日出尊ご一身によりて、これ、あずかりおわしませるわけではあるけれども。すなわち、酔興漢ご自身こそによりて・これまた、内塞せずにおませる御方によりて・ではあるけれどもである。

etaiś cānyaiś ca sambahulair mahā-  
śrāvakaiḥ sambahulaiś ca bodhi-sat-  
tvair mahā-sattvaiḥ | tad yathā mañju-  
śriyā ca kumāra-bhūtena |

それはともかく、また、他餘にとはこれまかりおらんほどにもおるであろうきわのではあるけれども、諸々の、衆多たりけらしとはおろうおおみものごとども、すなわち、諸々の、大きな声聞客がたご一身らによりても、これまた、衆多たらまほしとはおろうおおみことからどものことにもあられるであろうはずのではあるけれども、また、諸々の、菩提が淵映なりけらしとはあそばれん御方がた、すなわち、諸々の、大いたる有情がたご自身によりてでもおわしませようところではあった。

当然、和雅徳祿尊ご一身としてもかたじけのうせんほどにとあらせたまうきわのではあるけれども、孺童が已成なりてはあそばせる御方によりてまかりおかせられますきわにとおわたしたのもあることにはなる。

ajitena ca bodhi-sattvena gandha-has-  
tinā ca bodhi-sattvena

これまた、超克せずにいる者のことにもあられますはずのではあるけれども、菩提という剛決ご自身によりてでは、香気という大象一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、また、これ、菩提が有情なりけらしとはおわさん御方によりてであらせられますところでもあった。

nityodyuktena ca bodhi-sattvenānikṣ=  
ipta-dhurena ca bodhi-sattvena |

すなわち、凡常たりけらしものごとどもが遵修なりてはいることがらのことにもおかれ  
るはずのではあるけれども、菩提という剛決ご自身によりてでは、これまた、重荷の定措  
せずにいる仁者一身としてもあそばせるきわのではあるけれども、これ、菩提が有情なり  
けらしとはおわさん御方によりてであらせられますところでもあった。

etaiś cānyaiś ca sambahulair bodhi-  
sattvair mahā-sattvaiḥ |

それはともかく、また、これ、外餘とてはまかりありけるばかりともあらねばならな  
かったところではあるけれども、衆多たりけらしとはおろうきわにともおらん者たち、す  
なわち、諸々の、菩提という剛決がたご自身によりてでは、これまた、諸々の、大きな  
有情がたご一身らによりてあそばせたまうばかりにとこそおわたのでなければならぬ。

śakreṇa ca devānām indreṇa brahmaṇā  
ca sahāṃ-patinā |

また、全能天ご自身のこととともあらねばならぬところではあるけれども、すなわ  
ち、諸々の、神明たち一身らのたるべくこれわたらしょうきわとなければならぬばかり  
の、能帥ご自身によりてでは、これまた、梵寂天ご一身としてもあそばせるきわのではあ  
るけれども、また、堪忍之当主ご自身こそによりてではおわしましたところでもなければ  
あらぬ。

etaiś cānyaiś ca sambahulair deva-  
putra-nayuta-śata-sahasraiḥ ||1||

それはともかく、すなわち、他餘にとはこれつこうまつらんほどにもいるばかりの  
はあるけれども、これまた、衆多なりけらしとはあらんものごとどもによりてでも、ま  
た、諸天尊という嫡子らがこれ那由多末結たるをえるなる百法が千事たらまほしとはおろ  
うことがらどもによりてこれおかせられましようきわにともあらせたもうた。

<—>

tatra khalu bhagavān āyusmantam śāri-  
putram āmantrayati sma |

かたや、そのつど、具徳におかせられましては、慧命、すなわち、舍利が嗣子なりけ  
らしともあそばれん御方に対して、御喚談これたまわすのであった。

asti śāri-putra paścime dig-bhāge ito  
buddha-kṣetram koṭi-śata-sahasraṃ bud-  
dha-kṣetrāṇām atikramya sukhāvati  
nāma loka-dhātuḥ |

「舍利が孝子たる方よ、後末ならまほしけれとはまかりあろうばかりの、諸方今境と  
いう分位一身に於て、これまた、去来なりてゐる者が、また、本土の覚解なりてゐる  
仁事、すなわち、俱胝という百法どもが千事たらまほしともおろう者に取りて・諸々  
の、佛陀らという国土そのことどものなるべきはずと・こそではありますが、これ  
また、越度なれるや、また、安楽という近畿圏、すなわち、名字そのことのことでも  
あるところの、世間という文界自身が、これまた、有るのであります。

tatrāmitāyur nāma tathāgato Śrhan  
samyak-sambuddha etarhi tiṣṭhati dhr=  
iyate yāpayati dharmam ca deśayati |

そのつど、命分の裁量せずにいる仁事そのこととしてはかたじけのうわたらせんほ  
どにともおわませるが、また、名号そのことのこととはまかりおかれんばかりと  
もあられましようところの、如来ご一身、すなわち、堪底ならせつつはいませるばか  
りの、これまた、統真尊も、やはり、直立あそばされ、持任せられたまい、為活せし

めくだしおかせられ、また、法理そのことをしてではありますけれども、すなわち、宣通せしめたまわすのであります。

tat kiṃ manyase śāri-putra kena  
kāraṇena sā loka-dhātuḥ sukhāvātīty  
ucyate |

さようなものごとが、これまた、何ごとにと、ご曉知できたまわれるや。舍利が嫡子たる方よ。誰としてはおらねばならなかったきわの、因用によりてか、さような世間が素界ならざるべからざりける場も、また、易樂という近畿圏そのもののことであるところではなければならぬ。というふうに、弁白せられるのでありましようや。

tatra khalu punaḥ śāri-putra sukhāv-  
atīyāṃ loka-dhātu nāsti sattvānāṃ  
kāya-duḥkhaṃ na citta-duḥkhaṃ apram-  
āṇāny eva sukha-kāraṇāni |

ところで、こなた、そのつど、舍利が嗣子たる方よ、安樂という近畿圏そのものとしてはおったばかりともいるきわの、すなわち、世間という界理自身に於て、これまた、諸々の、剛映たち一身らのならまほしと、また、身基が苦渋たりけらしものごとが、無いのであります。すなわち、諸心意という渋苦のことではなく、これまた、未称量どもそのこととしてでもおらねばならぬにはほかならぬはずでもあるのが、また、諸々の、易樂による作用そのことどもになければなりませんまい。

tena kāraṇena sā loka-dhātuḥ sukhāv-  
atīty ucyate ||2||

すなわち、さような、因用のことにあらざるべからざりけることがらによりてではあらねばなりません。これまた、さような世間が文界ならざるべからざりける延も、また、安樂という近畿圏そのものとしておろうはずでなければならぬ。というふうに、弁釈されはするのでもあります。」

⟷

punar aparaṃ śāri-putra sukhāvati  
loka-dhātuḥ saptabhir vedikābhiḥ sap-  
tabhis tāla-paṅktibhiḥ kiṅkiṇī-jālais  
ca samalamkṛtā

「ところが、更に、舍利が孝子たる方よ、すなわち、易樂という近畿圏そのものが、これ、世間という素界自身のこととしてはあらねばならなかったところでもあります、これまた、七法どもそのこととしてではおろうはずともおらんばかりの、また、当知せしめうるにたるままならまほしとはあろう砌のことでもあるところの、七事そのことども、すなわち、諸々の、指葉樹という五連伍どもそのものによりてでは、これまた、諸々の、馱鈴架という羅網どもそのことによりてでもまかりあらんばかりとはありまするけれども、また、文致なりているきわにおるのでなければなりません。

samanta-to Śnuparikṣiptā citrā darś-  
anīyā caturṇām ratnānām | tad yathā  
su-varṇasya rūpyasya vaidūryasya  
sphaṭi-kasya |

すなわち、近辺智の上からは、これまた、汲度しているきわにとおらん場としてもおらねばならぬばかりの、彩色境そのものが、観見せられるを要するべかれとはあろうばかりにもおるではありませんが、また、諸々の、四法そのことども、すなわち、諸々の、宝鎮どもそのことのたらまほしとつこうまつろうばかりにおるはずでなければなりません。当然、極妙ならまほし相状一身のたりけらしともおるが、妙容義そのことのたらまほしとはおり、これまた、磔塊義そのことのたりしともおるが、精晶体のままなりとはある者のたりけりともおったことにはなるはずであります。

evaṃ rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-  
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-  
kṣetram || 3 ||

是の如くにこそ、諸々の、形色そのことどもによりても、また、舍利が嫡子なる方よ、諸々の、覺了せられてある本土が功德たりけらし淨嚴智たち自身によりては、すなわち、修致せられてあるところとてもまかりあらねばならなかったばかりとはある

ところが、さような佛陀という国土のことにあらざるべからざりけるものごとでなければなりません。」

◁三▷

punar aparaṃ śāri-putra sukāvat [ī]  
loka-dhātau sapta-ratna-mayyaḥ puṣkar=  
iṇyaḥ tad yathā suvarṇasya rūpyasya  
vaiḍūryasya sphaṭkasya lohitaṃuktasya=  
āśmagarbhasya musāragaiivasya saptam=  
asya ratnasya |

「ところで、更に、舍利が鬘子なる方よ、これまた、安樂という近畿圏そのものも、また、世間という界理一身に於ては、すなわち、七事による宝陳どもの練成これなるにたるべくもおらねばならぬきわの、これまた、沢沼池そのものの方からあずかりおろうはずでこそなければなりません。当然、金たりけらしことがらのなりけりとはあつたはずでもあるが、また、銀たらまほし者のなるべかれとはあつたばかりでもあり、瑠璃たりけらしものごとのなりきとはあろうはずであるが、すなわち、水晶たらまほしことがらのなりとてもあり、珊瑚たりけらし者のなるべかれとはあろうはずであるが、これまた、馬腦たらまほしものごとのなるべからんともあり、琥珀たりけらしことがらのなるべきとはあるであらうはずでもあるが、また、第七品次そのこと、すなわち、宝鏡そのことのたるべけんともおろうばかりにはいることにもなります。

aṣṭāṅgopeta - vāri - paripūrṇāḥ sama=  
tīrtha-kāḥ kāka-peyā su-varṇa-vālukā=  
saṃstrtāḥ |

これまた、八法という諸支分が圓備しておる潤水が補増なりてはいるきわならまほしともあろうばかりにして、等同たりけらし者らが津梁なるべきまたらまほしとはおつたばかりともあり、群鳥らにより飲服せられざるをえぬところにはつこうまつらんばかりとてもあり、また、極妙ならまほしものごとどもが形相たるべき諸堆沙が展布してはいるきわならまほしとまかりあろうばかりにもなければなりません。



tāsu ca puṣkarīṇīṣu samantāc catur-  
diśaṃ catvāri sopānāni citrāni darś-  
aniyāni caturṇām ratnānām tad yathā  
su-varṇasya rūpyasya vaidūryasya  
sphaṭi-kasya |

すなわち、さような、諸々の、沢沼池としておらざるべからざりける廷どもに於て  
ではありまするけれども、これまた、切刃智自身こその方からは、四事という方向境  
そのものに対しても、また、諸々の、四法どもそのこと、すなわち、諸々の、突刃  
そのことどものごことにはあろうはずの、諸々の、光彩どもそのことも、これまた、得  
見されるを要すべからんとあるわけであり、また、四事そのことども、すなわち、諸  
々の、宝陳どもそのことごのたりしとはおろうはずにもなければありませぬ。当然、妙  
善なりけらし色調一身のたるべしとはおるが、妙色義そのことごのなりとともあり、こ  
れまた、錯磯義そのことごのたりしとはおるが、結晶体のままなりとともあることがら  
のたりけりとはおったことにもなるはずであります。

tāsāṃ ca puṣkarīṇīnām samantād ratna-  
vrkṣā jātāś citrā darśaniyāḥ saptānām  
ratnānām tad yathā suvarṇasya rūpy-  
asya vaidūryasya sphaṭikasya lohita-  
muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya  
saptamasya ratnasya |

また、さような、諸々の、沢沼池としておらざるべからざりける砌どものならまほ  
しとこそではありまするけれども、すなわち、近刃智自身の方からは、これまた、諸  
々の、宝鎮という主幹たち一身らも、また、誕生なりているきわにとはおるのでも  
あります。すなわち、彩畫境そのものが、これまた、観見せられるを要するべかれと  
あるわけですが、また、七法そのことども、すなわち、諸々の、宝陳どもそのことご  
のたらまほしとはおろうばかりにもなければありませぬ。当然、金なりけらし者のたる  
べきはずとはおるであろうが、これまた、銀ならまほしものごとごのたるべけんとも  
おり、瑠璃なりけらしことごのたるべくはおろうはずでもあるが、また、水晶なら  
まほし者のたるにとはおろうばかりにもあり、珊瑚なりけらしものごとごのたりけれと

はおったはずであるが、すなわち、馬腦ならまほしことからのたりしともおり、これまた、琥珀なりけらし者のたりけりとはおったはずでもあるが、また、第七品次そのこと、すなわち、宝鏡そのこととなりけりとはあつたことにもなります。

tāsu ca puṣkarīṅṣu santi padmāni  
jātāni nīlāni nīla-varṇāni nīla-  
nirbhāsāni nīla-nidarśanāni | pītāni  
pīta-varṇāni pīta-nirbhāsāni pīta-  
nidarśanāni | lohītāni lohita-varṇāni  
lohita-nirbhāsāni lohita-nidarśanāni |  
avadātāni avadāta-varṇāni avadāta-  
nirbhāsāni avadāta-nidarśanāni | cit-  
rāni citra-varṇāni citra-nirbhāsāni  
citr [ā] - nidarśanāni śakaṭa - cakra-  
pramāṇa - pariṇāhāni |

これまた、さような、諸々の、沢沼池のことにあらざるべからざりける場どもにこそ於てではありまするけれども、諸々の、標華そのことどもが、生成せられてあるものごとどもに取りて、また、有るのであります。

すなわち、諸々の、青たりけらしことがらどもは、青色が顔色なりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、諸々の、青たらまほし者らが光輝なりけらしものごとどもに対しても、また、諸々の、青色による開示どもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

諸々の、黄たりけらしことがらどもは、すなわち、黄色が相状なりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、諸々の、黄たらまほし者らが輝影なりけらしものごとどもに取りても、また、諸々の、黄色による示現そのことどものことにこそあろうはずでなければなりませぬ。

すなわち、諸々の、赤たりけらしことがらどもは、赤色が形相なりけりともあらねばならなかつたばかりではあるが、これまた、諸々の、赤たらまほし者らが光輝なりけらしものごとどもに対しても、また、諸々の、赤色による開示どもそのこととしておろうはずにこそなければなりませぬ。

諸々の、淨白にといることがらどもは、すなわち、白色が色調たりけらしともおらねばならぬばかりにはいるが、これまた、諸々の、淨白とてある者らが輝影なりけらしものごとどもに取りても、また、諸々の、白色による示現そのことどものことにこそあろうはずでなければなりません。

すなわち、諸々の、艶彩たりけらしことがらどもは、色彩が顔色なりけりともあらねばならなかつたばかりとてはあるが、これまた、諸々の、濃彩たらまほし者らが光輝なりけらしものごとどもに対しても、また、諸々の、彩艶境による開示どもそのこととしておろうはずにこそなければなりません。

すなわち、車台という陣輪智による称量が広長たるべけれとはつこうまつらんほどにともいるきわにこそなければなりません。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣtra-  
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṁ tad buddha-  
kṣetram ||4||

是の如く、諸々の、型色そのことどもによりては、舍利が孝子なる方よ、これまた、諸々の、覚解せられておる本土が功德たりけらし嚴淨智たち自身によりてでも、また、文飾せられておるきわにとはまかりおらねばならなかつたばかりにもいるのが、すなわち、さような佛陀らという国土のことにあらざるべからざりけることがらでなければなりません。」

〈四〉

punar aparaṁ śāri-putra tatra buddha-  
kṣetre nitya-pravāditāni divyāni  
tūryāni | su-varṇa-varṇā ca mahā-  
prthivī ramaṇīyā |

「ところが、更に、舍利が嫡子なる方よ、そのつど、本土が覺了されてある仁事そのことに於てでは、庸常たらまほし者らが通奏（演奏）なりてもいるきわにとはおらねばならぬものごとども、すなわち、諸々の、天上義そのことどもが、諸々の、雅樂義どもそのことに取りてつこうまつらんばかりとてあるところではなければなりません。これまた、妙善なる相状が形相たりけりともおつたばかりのではありませんけれども、

また、大いからまほし垣塊地そのものが、すなわち、味著せられるを要するばかりとはまかりあろうほどにもおもしろいでしょうが。

t a t r a   c a   b u d d h a - k ṣ e t r e   t r i ṣ k ṛ t v o  
r ā t r a u   t r i ṣ k ṛ t v o   d i v a s a s y a   p u ṣ p a -  
v a r ṣ a ṃ   p r a v a r ṣ a t i   d i v y ā n ā ṃ   m ā n d ā r a v a -  
p u ṣ p ā ṇ ā ṃ   |

これまた、そのつどではありますけれども、佛陀という国土そのことに於ては、三度にわたり。また、初夜陰そのものに於ても、三度にわたり。すなわち、晝日智ご一身のたるべしとはおらんきわの、華美という時雨そのことが、雨潤するのであります。これまた、端巖ならまほしけれともあろうばかりの、諸々の、晏寧花らという美花そのことどものたりけらしとはつこうまつらんほどにもおるではありますけれども。

t a t r a   y e   s a t t v ā   u p a p a n n ā s   t e   e k e n a  
p u r o   b h a k t e n a   k o ṭ i - ś a t a - s a h a s r a ṃ  
b u d d h ā n ā ṃ   v a n d a n t i   a n y ā ṃ l   l o k a - d h ā t ū n  
g a t v ā   |

そのつど、およそ、諸々の、有情らとしておらざるべからざりけむ者たちも、また、往生これもうしてはいるきわにもおもしろいでしょうが、彼ら自身は、すなわち、一事そのことによりて、これまた、先前に・また、設齋なりていることがらによりて、すなわち、俱胝という百法どもが千事なりけらしともあらん者に対し・これまた、諸々の、覚解なりているおおみものごとどものたるべく、礼奠なりもうすのであります。これ、外餘とてはまかりあつたばかりともあろうところの、また、諸々の、世間という文界たち一身らに取り、往通なりてこそであるわけですが。

e k a i k a ṃ   c a   t a t h ā g a t a ṃ   k o ṭ i - ś a t a -  
s a h a s r ā b h i ḥ   p u ṣ p a - v r ṣ ṭ i b h i r   a b h y a v a =  
k ī r y a   p u n a r   a p i   t ā m   e v a   l o k a - d h ā t u m  
ā g a c c h a n t i   d i v ā   v i h ā r ā y a   |

すなわち、一法一事にこそではありますけれども、これまた、府君ご自身に対して、また、俱胝という百法が千事なりけりとはあったところの、諸々の、華美という甘雨滴どもそのものによりて、供散もうしあげたるのち、ことさらに、さよくな、まさしく、廷そのもの、すなわち、世間という素界ご一身に取りてこそ、これまた、行詣なりもうすのであります。また、晝時、これ、直日ご自身のおんためとてもつこうまつらんばかりとはあらんところでもあります。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-  
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-  
kṣetram ||5||

是の如くにこそ、諸々の、形色そのことどもによりては、舍利が嗣子たる方よ、すなわち、諸々の、佛陀らという本土が功德なりけらし浄嚴智たち一身らによりても、これまた、修飾されてあるところとてはまかりあらねばならなかつたばかりともあるところが、さよくな国土が覚了せられてある仁事のことにあらざるべからざりけることがらでなければなりません。」

〈五〉

punar aparaṃ śāri-putra tatra buddha-  
kṣetre santi haṃsāḥ krauñcā mayūrās  
ca |

「ところで、更に、舍利が孝子たる方よ、また、そのつど、佛陀という本土そのことに於てでは、諸々の、客雁たち自身が、すなわち、諸々の、仙鶴たち一身らとして、これまた、有るのであります。また、諸々の、神鳳たち自身のことでもあったところではありますけれども。

te triṣkṛtvo rātrau triṣkṛtvo divas-  
asya saṃnipatya saṃgītiṃ kurvanti sma  
kha-ka-kha-kāni ca rutāni pravāhar-  
anti | teṣāṃ pravāharatām indriya-  
bala-bodhy-aṅga-śabdo niścarati |

さような者たち一身らは、すなわち、三度。これまた、後夜陰そのものに於てでも、また、三度。すなわち、これ、晝日智ご自身のなるべかれとてつこうまつらんばかりに、雲集なるや、戯曲儀そのものに対し、起作なりもうすのではありましたが、これまた、空穴のままたりける者らが閑虚なりしまとてもあろうおおみものごとどもに取りてではありますけれども、また、諸々の、鳴響なりているおおみことがらどもがこそ、すなわち、宣普もうすのであり、さような者たち一身らのたるべけん、これまた、普宣せしめられてある砌に対し、また、諸精根義が気力なりけらし諸菩提が体肢たるべき言音自身が、行演これなるのであります。

t a t r a   t e ṣ ā m   m a n u ṣ y ā ṇ ā m   t a m   ś a b d a m  
ś r u t v ā   b u d d h a - m a n a s i k ā r a   u t p a d y a t e  
d h a r m a - m a n a s i k ā r a   u t p a d y a t e   s a m g h a -  
m a n a s i k ā r a   u t p a d y a t e   |

そのつど、さような、諸々の、人霊尊らとしておらざるべからざりけるおおみものごとどものなるべからんとて、すなわち、さような音声のことにおわさざるべからざりける御方に取り、上聞なりもうしてや、これまた、心念の覚解せられておる仁者一身が、また、現出できるのであります。すなわち、諸理法が心念たりけらし御方にあつては、これまた、生起せられこそおかれますわけであり、また、義衆という心念自身としてでも、すなわち、表出できは、これ、わたらしょうはずでもあります。

t a t   k i m   m a n y a s e   ś ā r i - p u t r a   t i r y a g -  
y o n i - g a t ā s   t e   s a t t v ā ḥ   n a   p u n a r   e v a m  
d r a ṣ ṭ a v y a m   |

さようなことがらを、これまた、何ごとにと、量知せられおかるや。舍利が嫡子なる方よ。諸畜生が生門儀たりし者らの往通なりているきわにとはおらねばならぬばかりにもおらんのが、また、さような、諸々の、剛決らのことにあらざるべからざりける者たちでなければなりません。さりながら、是の如くつこうまつらんほどにとはおらねばならなかったのも、すなわち、得見されねばならぬものごとでなければなりません。

tat kasmād dhetoh nāmāpi śāri-putra  
tatra buddha-kṣetre nirayāṇām nāsti  
tiryag-yonīnām yama-lokasya nāsti |

さようなことがらそのことが、誰としてはおらんきわの、代因の方からこれおるのでもありましようや。これまた、名字そのことがであるわけでこそはあっても、舍利が鬪子なる方よ、そのつど、佛陀らという国土そのことに於ては、諸々の、囚獄たちのたらまほしかれと、有在しもせず、また、諸々の、禽獸という生門たち一身らのなるべきはずとて、すなわち、雙世智という世間自身のたらまほしかれと、住有のありようがないのであります。

te punaḥ pakṣi-samghās tenāmitāyusā  
tathāgatena nirmitā dharma-śabdaṃ  
niścārayanti |

ところが、さような、諸々の、遊禽ならまほしける合衆のことにあらざるべからざる者たちは、さような寿命が度量せられずにある仁事としておらざるべからざりけるおおみものごとのことにもあられたまうところの、如来ご一身によりては、これまた、応化なりているきわにともおり、法則という言音自身をして、また、行展せしめるのであります。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-  
guṇa-vyūhaiḥ samalamkṛtaṃ tad buddha-  
kṣetram ||6||

是の如くにこそ、諸々の、型色どもそのことによりてでは、舍利が孝子たる方よ、すなわち、諸々の、覚了されてある本土が功德なりけらし嚴淨智たち一身らによりても、これまた、文致なりておるきわにとはまかりおらねばならんほどにもいるのが、さような佛陀という国土としておらざるべからざりけることがらになければなりませぬ。」

<六>

punaraparaṃ śāri-putra tatra buddha-  
kṣetre tāsāṃ ca tāla-paṅktīnām teṣāṃ

ca kiñkiṇī-jālānām vāteritānām valgur  
mano-jaḥ śabdo niścarati |

「ところで、更に、舍利が嬌子たる方よ、また、そのつど、本土の覚解なりている仁事そのことに於ては、すなわち、さよふな、諸々の、指葉樹という五連伍どものことにあらざるべからざりける場どもとしてもおらねばならなかつたきわのではありませんるけれども、これまた、さよふな、諸々の、伝鈴架という網羅どものことにあらざるべからざりける者たちのなりけりとあつたところでなければならぬばかりのではありませんるけれども、また、諸々の、動吹しておるものごとどもの飄鼓なりている仁事どもそのことのたらまほしとこそ、すなわち、微妙にとはこれつこうまつらんほどにもいるが、これまた、諸意中の得生なるにたるべくはおらんきわにともいるではあらうばかりの、音声自身が、また、出演これあるのであります。

tad yathāpi nāma śāri-putra koṭi-śata-  
sahasrāṅgi-kasya divyasya tūryasya  
cāryaiḥ sampravāditasya valgur mano-  
jaḥ śabdo niścarati |

当然、のみならず、舍利が嗣子なる方よ、俱胝が百法たりける千事どもが要支なりきままたるにともおらんきわにはこれおりましたよばかりの、すなわち、天上義そのことのたらまほしともあらねばならぬところとしてはあるが、これまた、器楽義そのことのたらまほしとおるのでなければならぬはずの、また、諸々の、品行義そのことどもによりて、すなわち、共奏（共演）せしめられてあるおおみことがらのなるべからんとこそ、これ、清激とてまかりあつたばかりともあるが、これまた、意中が生得はたすにたるべくはおらんきわの、言音一身も、また、行演なりもうしはすることにもなります。

evam eva śāri-putra tāsām ca tāla-  
pañktīnām teṣām ca kiñkiṇī-jālānām  
vāteritānām valgur mano-jaḥ śabdo  
niścarati |





tat kiṃ manyase śāri-putra kena  
kāraṇena sa tathāgato Śmitāyur nāmo  
ocyate |

「さようなことがらをば、また、何ごとにと、ご知解できたまわさるや。舍利が孺子たる方よ。すなわち、何ごととしてはおろうはずの、作用によりてか、これまた、さような府君のことにあそばれざるべからざりける御方も、また、康寿の了度せられずにおる仁事、すなわち、名号そのごとにと、これまた、弁白せられおかさるのでありましようや。

tasya khalu punaḥ śāri-putra tathāg-  
atasya teṣāṃ ca manuṣyāṇāṃ aparimitam  
āyur pramāṇam | tena kāraṇena sa  
tathāgato Śmitāyur nāmoocyate |

ところが、かたや、さような御方ご一身のなるべきはずとはおわしまさねばならぬところにもおかれんばかりのではありませんが、舍利が孝子たる方よ、また、如来ご自身、すなわち、さような、諸々の、人霊尊らとしておらざるべからざりけるおおみものごとどものならまほしともつこうまつろうばかりとてあるであろうところのではありませんるけれども、これまた、量了せずにはいるきわの、命分そのことも、また、定量そのことのことにあつたはずでなければなりません。すなわち、さような因用としておらざるべからざりけることがらによりて、これまた、さような府君のことにあられざるべからざりける御方が、また、寿命が量度されずにある仁事そのこと、すなわち、名字そのごとにと、弁釈されおかれるのであります。

tasya ca śāri-putra tathāgatasya  
daśa kalpā anuttarāṃ samyak-sambodhim  
abhisambuddhasya ||8||

それはともかく、舍利が孺子たる方よ、これまた、如来ご一身のならまほしけれどもあらねばならなかつたところの、また、十法どもが、すなわち、諸々の、代紀たち自身としてでこそはあるが、これまた、未央たりけりともおつたばかりとはいるきわ

の、正真道そのものに対しても、また、これ、権現なりあそばせておわせる御方の  
なりけりとまかりあったばかりにあらうはずでなければなりませんまい。」

〈八〉

tat kiṃ manyase śāri-putra kena  
kāraṇena sa tathāgato Śmitābho nāmo  
ocyate |

「さようなものごとにと、すなわち、何ごとをば、知量されおかさるや。舍利が彌子  
たる方よ。これまた、誰のことにはあらうはずの、作用によりてか、さような府君  
としてあらせざるべからざりける御方も、また、所見なるにたる者の裁量せずにいる  
仁者、すなわち、名号にと、弁白せられたまわさるのでありましょうや。

tasa khalu punaḥ śāri-putra tathāg-  
atasyābhā apratihatā sarva-buddha-  
kṣetreṣu |

ところで、こなた、さようなおおみものごとそのことにはあそばりようはず  
の、これまた、舍利が孝子なる方よ、如来ご一身のたるべしともおらねばなるまいき  
わの、風光美そのものが、また、対擬せずにおるのでなければなりません。すなわち、  
これ、諸々の、一切らの覚解せられておる国土どもそのことに於てつこうまつらんば  
かりなりけりととはあったところでもなければなりません。

tena kāraṇena sa tathāgato Śmitābho  
nāmoocyate |

さような因用としておらざるべからざりけることがらによりて、これまた、さよう  
な府君のことにおわさざるべからざりける御方が、また、所見はたすにたる者が度量  
せられずにある仁者自身、すなわち、名字そのこととこそ、弁釈されおかさるので  
あります。

tasya ca śāri-putra tathāgatasyāpra-  
meyaḥ śrāvaka-saṃgho yeṣāṃ na su-karaṃ  
pramāṇam ākhyātum śuddhānām arhatām |

それはともかく、これまた、舍利が嫡子たる方よ、また、如来ご一身のなりしはずとはあろうところにもありましようばかりの、すなわち、称量せられずすむとはおらんきわにもいるではあろうばかりの、これまた、声聞客らという公衆自身も、また、諸々の、およそ、自らの、極妙に起作なるにたるべききわにとはおるであろう、称量に取り、上称するのが治浄なりているわけでもなかりけむおおみものごとものたるべけん、すなわち、諸々の、阿羅漢がたご一身らのならまほしとはつこうまつらうばかりとてあらんはずでもなければありませぬ。

evam rūpaiḥ śāri-putra buddha-kṣetra-  
 guṇa-vyūhaiḥ samalambitā tad buddha-  
 kṣetram ||9||

是の如く、諸々の、型色どもそのことによりてでは、舍利が嫡子たる方よ、これまた、諸々の、佛陀らという本土が功德なりけらし嚴浄智たち一身らによりても、また、文飾せられておるきわとはまかりおらねばならなかつたほどにともいるのが、さような国土が覺了されてある仁事としておらざるべからざりけることがらになければありませぬ。」

<九>

punar aparaṃ śāri-putra ye amitāyusā  
 tathāgatasya buddha-kṣetre sattvā  
 upapannāḥ śuddhā bodhi-sattvā avini-  
 vartanīyā eka-jāti-pratibaddhās teṣāṃ  
 śāri-putra bodhi-sattvānāṃ na su-karaṃ  
 pramaṇam ākhyātum anyatrāprameyāsaṃ-  
 khyeyā iti saṃkhyāṃ gacchanti |

「ところが、更に、舍利が孝子たる方よ、諸々の、およそ、康寿の了度せられずにおる仁事、すなわち、府君のなりとてあるべき、佛陀という本土に於て、有情らのことにあらざるべからざりけむ者たちが、これまた、容迎せられてはあるにもなければありませぬ。

浄治せられてはあそばれるところの、諸々の、菩提が剛決たりけらしともおかせん御方がたは、これ、退離せられざるを要すべからんともおわしますが、また、諸々の、

一事が生得体なりけらし者らの繫属なりてはいるきわたるべしともあらせりょうばかりの、すなわち、諸々の、さよふな、自らの、これまた、舍利が嫡子なりける御方よ、菩提という有情たちのたりけれとはおるべかりしも、また、妙善に、これ、為作はたすにたるべくはおろうばかりともいまいしょうきわの、定量に対して、称上たまわさるのが別異にとこれおかせるわけではない御方がたが、また、『量称されずすむものごとどもによるとも算数せられずにはすむほどなりともかたじけのうせんほどとてあそぼす。』というふうにごそ、すなわち、累數位そのものに取り、行通ありたまわすわけであります。

tatra khalu punaḥ śāri-putra buddha-  
kṣetre sattvaiḥ praṇidhānam kart-  
avyam | tat kasmād dhetoḥ yatra hi  
nāma tathā rūpaiḥ sat-puruṣaiḥ saha  
samavadhānam bhavati |

ところで、かたや、そのつど、舍利が嗣子たる方よ、国土の覚解なりてゐる仁事そのことに於ては、これまた、諸々の、剛決たちによりても、また、直願そのことが、すなわち、為作せられねばならぬにはありますが、さよふなことがらそのことが、これまた、誰としてもおらんきわの、式因の方からあずかりあるわけでありましようや。すべからく、名号そのことは、同然、諸々の、形色そのことどもによりてこそまかりおらんほどにといるわけですから、諸々の、純実ならまほしけるものごとどもという客土たち一身らによりても、また、同貫に、公共そのことが、現存これあるわけであります。

nāvāra-mātra-keṇa śāri-putra kuśala-  
mūlenāmitāyusas tathāgatasya buddha-  
kṣetre sattvā upapadyante |

すなわち、諸〈〈アーヴァラ、損惱〉〉らが分齊たりけらしとはおろうわけでもないままのではありませんが、舍利が孝子なる方よ、これまた、善利たりけらし根本そのことによりて、また、命分が量度されずにある仁事そのこと、すなわち、如来ご自身のなるべからんとこそ、これまた、佛陀らという本土そのことに於て、また、諸々の、

有情がたご一身らも、すなわち、これ、迎賀はたされますわけであります。

yaḥ kaś c ic chāri-putra kula-putro vā  
kula-duhitā vā tasya bhagavato Śmit-  
āyusas tathāgatasya nāma-dheyam śro-  
ṣyati śrutvā ca manasi-kariṣyati eka-  
rātram vā dvi-rātram vā tri-rātram vā  
catū-rātram vā pañca-rātram vā ṣad-  
rātram vā sapta-rātram vā vikṣipta-  
citto manasi-kariṣyati |

これまた、およそ、誰か、舍利が嫡子たりける御方よ、あるいは、部族が嗣子なり  
けれともおかれるか、あるいは、種族という女巫涯のこともあるであろう公子が、  
また、さような世尊としておらざるべからざりけるおおみことがら、すなわち、寿  
命の裁量せずにいる仁事そのことのことにはおわしょうともおかれんところの、それ、  
府君ご自身のたらまほしかれとこそ、これまた、名字により〈奉旨〉せられざるを  
えぬところとはいます御方に対して、奏聞ありもうすやもしれませぬ。

また、謹聴つかまつりてではありまするけれども、すなわち、心思これなることで  
ありましょう。あるいは、一夜毎にも、あるいは、二夜中でも、これまた、あるいは、  
三夜毎にも、あるいは、四夜中でも、あるいは、五夜毎にも、あるいは、六夜中でも、  
あるいは、七夜毎にも、また、志念なりておる者の積措なりている仁者一身として、  
心得これありもうすやはしれませぬ。

yadā sa kula-putro vā kula-duhitā vā  
kālam kariṣyati tasya kālam kurvataḥ  
so Śmitāyus tathāgataḥ śrāvaka-samgha-  
parivrto bodhi-sattva-gaṇa-puras-kṛtaḥ  
pura-taḥ sthāsyati |

あらかじめ、さような、あるいは、部累が孝子なるとてもいますところか、あるい  
は、部族という女巫涯のこともあったところに、これ、おかざるべからざりける者  
が、すなわち、時節自身に取りて、施作ありもうすことでありましょうが、さような、

時限に対し、起作なりつつおらざるべからざりけるおおみものごとのたるべけんには、  
これまた、さような康寿が度量せられずにある仁事としてあらせざるべからざりける  
御方のことにもあそばりょうところの、また、如来ご一身、すなわち、諸声聞客とい  
う合衆らの圍繞なりもうしてはおわせる御方こそが、これまた、菩提が剛決なりけら  
し諸部衆らの謙下これなりでもあらせる御方として、また、故宮の上から、すなわち、  
位立あそばせたまうやはしれませぬ。

so Śviparyasta-cittaḥ kālaṃ kariṣyati  
ca | sa kālaṃ kṛtvā tasyaivāmitāyusas  
tathāgatasya buddha-kṣetre sukhāvāt-  
yāṃ loka-dhātāv upapatsyate |

これまた、さような顛倒せずにいることがらどもが心神たらざるべからざりける御  
方も、また、時節自身に取り、御起作なりたまわすことではあろうけれどもであります。  
すなわち、さような御方ご一身が、これまた、時限智自身にと、為作はたされま  
してや、また、さような、命分の了度せられずにおる仁事としておわせざるべからざ  
りける御方のことにはわたらりょうはずともあられましようところの、府君ご一身の  
ならまほしけれとこそ、国土が覚了せられてある仁事そのこと、すなわち、易樂とい  
う近畿國そのものとしてはおったはずの、これまた、世間という界理ご自身に於て、  
また、《納生》できあそばすやもしれませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra idam artha-  
vaśaṃ sampaśyamāna eva vadāmi |

はたせるかな、舍利が嫡子たる方よ、すなわち、かような、諸利隣智らが致用智な  
らざるべからざりけらしおおみものごとに対してこそ、これまた、重複せられながら  
ではあるにもほかなりませぬが、また、作説これもうしあげんのみであります。

sat-kṛtya kula-putreṇa vā kula-duhitrā  
vā tatra buddha-kṣetre citta-praṇidh-  
ānaṃ kartavyam ||10||

すなわち、殷重これなりてのち、あるいは、種族という嗣子一身によりても、あるいは、族累という女巫涯そのものによりてでも、そのつど、佛陀という本土そのことに於てでは、これまた、意願が意念せられてある仁事そのことが、また、行作されねばならぬところとてあろうばかりにもなければありませぬ。」

<十>

tad yathāpi nāma śāri-putra aham  
etarhi tām parikīrtayāmi

「当然、のみならず、舍利が孝子たる方よ、私自身は、むしろ、さような砌そのものに取りて、称宛これもうさずもなるまいことにはなります。

evam eva śāri-putra pūrvasyām diśi  
akṣobhyo nāma tathāgato meru-dhvajo  
nāma tathāgato mahā-merur nāma tathā-  
gato meru-prabhāso nāma tathāgato  
mañju-dhvajo nāma tathāgataḥ |

すなわち、是の如くにもつかまつらんほどにとおりもうすきわにはほかなりませぬが、舍利が嫡子なる方よ、これまた、先来たりけりともおったばかりにはいるきわの、方面境そのものに於てでも、また、無雜擾尊ご一身、すなわち、名号そのことのことにはいまさねばならぬところが、これまた、如来ご自身におわしますばかりでなければなりませぬ。

また、妙高原山上 という定紋一身、すなわち、名字そのこととしてもいませるのが、これまた、府君ご自身にはあられますところでもあり、また、大きな妙高原山系 一身、すなわち、名号そのことのことにはいますところが、これまた、如来ご自身にあそばれますところでもあり、また、妙高原山上 という光明一身、すなわち、名字そのこととしてはいませるのが、これまた、府君ご自身におわしますところでもあり、また、和雅たらまほし紋標一身、すなわち、名号そのことのことにはいますところが、これまた、如来ご自身にあられるわけであります。



evam pramukhāḥ śāri-putra pūrvasyām  
diśi gaṅgā - nadī - vālukopamā buddhā  
bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti |

是の如く、諸々の、上首ならまほしけれともあそばれる御方がたが、また、舍利が鬮子たる方よ、東初なりけれとはあろう場、すなわち、方今境そのものに於ても、これまた、ガン河系 という江河および流沙が比喩値たりしとこそわたらしようばかりの、また、諸々の、覚解せられおかせておわせる御方がた、すなわち、諸々の、具徳がたとしてあらせたわけではありますが、これまた、空穴のままなりけることがらどもが閑虚たりしままなるとではあろうはずの、諸々の、佛陀らという国土そのことどもをして、また、諸舌下位という気根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめたまうや、これまた、命趣そのことに対し、また、御施作ありたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigraham  
nāma dharma-paryāyam ||11||

すなわち、至縁ならんとあそばせるに、これまた、汝らこそがおわしまさねばならぬところでもありますが、また、かような思惟せられずすむ者らという諸功德による称宛のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、一切どもが覺了されてある偏計智一身に取りては、これまた、名字そのこととしてでも、また、格法という絶句自身に対してまかりあったばかりとてなければならぬはずであります。」

<十一>

evam dakṣiṇasyām diśi candra-sūrya-  
pradīpo nāma tathāgato yaśaḥ-prabho  
nāma tathāgato mahārciḥ-skandho nāma  
tathāgato meru-pradīpo nāma tathāgato  
Snanta-vīryo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、是の如くにかたじけのうせんほどにはおらねばなりませぬが、これまた、順右たりけりともおったばかりにはいるきわの、方向境そのものに於てでも、また、月輪が日景なる燃燈一身、すなわち、名号そのことのことにはいますところが、これまた、府君ご自身にあられたまうはずでなければなりませぬ。

また、誉称という常光一身、すなわち、名字そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にはあそばれますところでもあり、また、大常的火焰という蘊蓄幹一身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご自身におわしますところでもあり、また、妙高原山系 という燃燈一身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にあられますところでもあり、また、無辺際たる勇猛智一身、すなわち、名号そのことのことにはいますところも、これまた、府君ご自身にはあそばれるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra dakṣiṇasyām  
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā  
bhagavantaḥ kha-kha-kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa saṃchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti |

是の如く、諸々の、元首がたご一身らが、また、舍利が孝子なる方よ、南当たたまほしかれとはおろう廷、すなわち、方面境そのものに於ても、これまた、ガン河畔 という河流および堆沙が譬喩値なるべきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、佛陀がたご自身、すなわち、諸々の、世尊がたとしておわせるであろうわけですが、これまた、空隙のままたりけることがらどもが閑暇なりきままたるにはおろうはずの、諸々の、本土の覚解なりている仁事どもそのことをして、また、舌下位という性根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめたまい、これまた、趨運そのことに取りて、また、御起作なりたまわすのであります。

pratīyātha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ  
nāma dharma-paryāyam ||12||

すなわち、計為あらんとおさせるに、これまた、汝らこそがあられまさねばならぬ  
ところでもあります。また、かような審思されずすむ者らという諸功德による  
宛念のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、一切が佛陀なりけらし  
計執智一身に対しては、これまた、名字そのこととしても、また、諸法規という  
重句自身に取りてまかりあるばかりとてなければなりませんまい。」

<十二>

evam paścimāyāṃ diśi amitāyur nāma  
tathāgato Śmita-skandho nāma tathāgato  
Śmita-dhvajo nāma tathāgato mahā-prabho  
nāma tathāgato mahā-ratna-keṭur nāma  
tathāgataḥ śuddha-raśmi-prabho nāma  
tathāgataḥ |

「すなわち、是の如くにはおらねばなりません。これまた、西後たらまほしかれ  
ともおろうきわにはおらんばかりの、方今境そのものに於てでも、また、寿命が量度  
されずにある仁事そのこと、すなわち、名号そのことのことにはいまいはずでは  
あるところが、これまた、如来ご一身にあそばすのでなければなりません。

また、陰堆幹の裁量せずにいる仁者自身、すなわち、名字そのこととしてもいま  
せるはずであるのが、これまた、府君ご一身にはおわすのでもあり、また、定紋が  
度量せられずにある仁者自身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずである  
ところが、これまた、如来ご一身にあらせたまうのでもあり、また、大きなおおみ  
ことがらという常光自身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、  
これまた、府君ご一身にあそばすのでもあり、また、大いたる者らによる宝陳という  
旗標自身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、  
如来ご一身におわすのでもあり、また、済浄せられておるものごとどもが諸光耀なる  
常光自身、すなわち、名字そのこととしてはいませるのも、これまた、府君ご一身に  
あらせるはずではあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra paścimāyāṃ  
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā

bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti |

是の如く、諸々の、上首たらまほしかれともあそばせる御方がたが、また、舍利が嫡子なる方よ、後末たりけれとはおろう砌、すなわち、方向境そのものに於ても、これまた、ガン河系 という江河および流沙が譬喩値なりきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、覚了せられおかれておわさる御方がた、すなわち、諸々の、具徳がたのことにあられたわけではありますが、これまた、空穴のままたりけることがらどもが閑虚なりきままたるにはおろうはずの、諸々の、佛陀という国土そのことどもをして、また、諸舌下位という器根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめたもうてのち、これまた、命趣そのことに対し、また、御施作ありたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigraham  
nāma dharma-paryāyam || 13 ||

すなわち、至縁ならんとおかせると、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような思惟せられずすむ者らという諸功德による称宛のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、一切の覚解せられておる偏計智自身に取りては、これまた、名号そのこととしてでも、また、律法という絶句一身に対してまかりおらんほどとなければならぬはずであります。」

<十三>

evam uttarāyāṃ diśi mahārciḥ-skandho  
nāma tathāgato vaiśvānara - nirghoṣo  
nāma tathāgato dundubhi-svara-nirghoṣo  
nāma tathāgato duṣpradharṣo nāma  
tathāgataḥ ditya-sambhavo nāma tathā-  
gato jale niprabho nāma tathāgataḥ  
prabhākaro nāma tathāgataḥ |

「すなわち、是の如くにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、勝上ならまほしけれともあろうところにはあらんばかりの、方面境そのものに於ても、また、大尋的焰熾という蘊蓄幹自身、すなわち、名字そのことのことによいまいはずではあるところが、これまた、如来ご一身におわすのでなければなりませぬ。

また、万庶的音韻自身、すなわち、名号そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、府君ご一身にはあらせたまうのもあり、また、連鼓が音詞たる妙音自身、すなわち、名字そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、如来ご一身にあそばすのもあり、また、卑近ならまほしける勝運自身、すなわち、名号そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、府君ご一身におわすのもあり、また、日当たる得有智自身、すなわち、名字そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、如来ご一身にあらせたまうのもあり、また、両水明ともそのこととしてはこれおらんはずともいるきわの、内光自身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご一身にあそばすのもあり、また、常光という品具自身、すなわち、名字そのこととしてはいませるのも、これまた、如来ご一身にはおわせるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra uttarāyām  
diśi gaṅgā - nadī - vālukopamā buddhā  
bhagavantah kha - ka - kha - kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti |

是の如く、諸々の、元首がたご自身が、また、舍利が嗣子なる方よ、北至たらまほしかれとはおろう場、すなわち、方今境そのものに於ても、これまた、ガン河畔という河流および堆沙が比喩値なるべきとこそわたらりょうばかりの、また、諸々の、佛陀がたご一身ら、すなわち、諸々の、世尊がたのことにあられるであろうわけですが、これまた、空穴のままたりけることがらどもが閑虚なりきままたるにとはおろうはずの、諸々の、本土が覚了されてある仁事そのことどもをして、また、舌下位という精根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめたまうや、これまた、趨運そのことに取り、また、御起作なりたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ  
nāma dharma-paryāyam ||14||

すなわち、計為あらんとおかせると、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような審思されずすむ者らという諸功德による宛念のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、一切らが佛陀なりけらし計執智自身に対しては、これまた、名号そのこととしてでも、また、諸法律という重句一身に取りてまかりおらんほどにとなければならぬはずであります。」

<十四>

evam adhastāyāṃ diśi siṃho nāma  
tathāgato yaśo nāma tathāgato yaśaḥ-  
prabhāso nāma tathāgato dharmo nāma  
tathāgato dharma-dharmo nāma tathāgato  
dharma-dhvajo nāma tathāgataḥ |

「すなわち、是の如くにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりませぬが、これまた、下局たりけりともおったばかりにはいるきわの、方向境そのものに於てでも、また、獅子尊自身、すなわち、名字そのことのことにはいましたはずではあるところが、これまた、府君ご一身におわすのでなければなりませぬ。

また、功譽そのこと、すなわち、名号そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にはあられますところでもあり、また、時譽という明照一身、すなわち、名字そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご自身にあそばれますところでもあり、また、法理尊一身、すなわち、名号そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身におわしますところでもあり、また、理法の住持これなるにたりませる君公ご一身、すなわち、名字そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、如来ご自身にあられたまうところでもあり、また、法則という紋標一身、すなわち、名号そのこととしてはいませるのも、これまた、如来ご自身にはあそばれるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra adhastāyāṃ  
diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā

bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti ।

是の如く、諸々の、上首ならまほしけりとはおわさる御方がたも、また、舍利が孝子たる方よ、次下なりけれとはあろう廷、すなわち、方面境そのものに於ても、これまた、ガン河系 という江河および流沙が譬喩値たりしとこそわたらしょうばかりの、また、諸々の、覚解なりたもうてあらせる御方がた、すなわち、諸々の、具徳がたのことにあそばれたはずであるわけですが、これまた、空穴のままなりけることからも閑虚たりしままなるとはあろうはずの、諸々の、佛陀らという国土そのことどもをして、また、諸舌下位という気根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめたまい、これまた、命趣そのことに対し、また、御施作ありたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigrahaṃ  
nāma dharma-paryāyam ||15||

すなわち、至縁ならんとおかせるに、これまた、汝らとしておわせねばならぬきわにもあるはずですが、また、かような思惟せられずにする者らという諸功德による称宛のことにあらざるべからざりけらしものごとが、すなわち、一切どもが覚了せられてある偏計智一身に取りては、これまた、名字そのこととしてでも、また、憲法という絶句自身に対してまかりあるばかりとてなければならぬはずであります。」

<十五>

evam upariṣṭhāyāṃ diśi brahma-ghoṣo  
nāma tathāgato nakṣatra-rājo nāma  
tathāgato indra-ketu-dhvaja-rājo nāma  
tathāgato gandhottamo nāma tathāgato  
gandha-prabhāso nāma tathāgato mahār-  
ci-skandho nāma tathāgato ratna-kusuma-  
samṣpūṣpita-gātro nāma tathāgataḥ sāl=

endra-rājo nāma tathāgato ratnotpala-  
śrīr nāma tathāgataḥ sarvārtha-darśī  
nāma tathāgataḥ sumeru-kalpo nāma  
tathāgataḥ |

「すなわち、是の如くにかたじけのうせんほどにとはおらねばなりません、これまた、上局たるべしともおらんきわにはいまいしょうばかりの、方今境そのものに於ても、また、梵韻という響声一身、すなわち、名号そのことのことにはいますところが、これまた、府君ご自身にあられたまうはずでなければなりません。

また、星宿という王威一身、すなわち、名字そのこととしてもいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にはあそばれますところでもあり、また、能帥という諸彗星が定紋なる君王一身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご自身におわしますところでもあり、また、諸香味という最後者一身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にあられたまうところでもあり、また、臭気という光明一身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご自身にあそばれますところでもあり、また、大常の火焰という陰堆幹一身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身におわしますところでもあり、また、諸宝鎮という花英が開敷せしめられてある艶肢一身、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご自身にあられたまうところでもあり、また、娑羅柵砦が御能たる王霸一身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご自身にあそばれますところでもあり、また、諸宝陳が寧睡花なる福祿境そのもの、すなわち、名号そのことのことにはいますはずであるところが、これまた、府君ご一身におわせるのでもあり、また、一切という平準智をして見在せしめうるにたりませる君公ご自身、すなわち、名字そのこととしてはいませるはずであるのが、これまた、如来ご一身にあらせたまうのでもあり、また、妙高山山上 という当期自身、すなわち、名号そのことのことにはいますところも、これまた、府君ご一身にはあそばせるはずでもあります。

evam pramukhāḥ śāri-putra upariṣṭhāy=  
ām diśi gaṅgā-nadī-vālukopamā buddhā



bhagavantaḥ kha - ka - kha - kāni buddha-  
kṣetrāṇi jihvendriyeṇa samchādayitvā  
nirveṭhanam kurvanti |

是の如く、諸々の、元首がたご自身が、また、舍利が嫡子たる方よ、直上なるべけれとはあろう砌、すなわち、方向境そのものに於てでも、これまた、ガン河畔という河流および堆沙が比喩値たるべしとこそわたらしようばかりの、また、諸々の、佛陀がたご一身らとしてこれおわせんきわの、すなわち、諸々の、世尊がたごのことにあられるであろうわけですが、これまた、空穴のままなりけることがらどもが閑虚たりしままなるとではあろうはずの、諸々の、本土の覚解せられておる仁事どもそのことをして、また、舌下位という性根義そのことによりて、すなわち、被覆せしめあらせられてのち、これまた、趨運そのことに取りて、また、御起作なりたまわすのであります。

pratiyatha yūyam idam acintya-guṇa-  
parikīrtanam sarva-buddha-parigraham  
nāma dharma-paryāyam ||16||

すなわち、計為あらんとおかせるに、これまた、汝らとしてこそあそばせねばならぬきわにもありましようが、また、かような審思されずにすむ者らという諸功德による宛念のことにあらざるべからざりけらしものが、すなわち、一切が佛陀たりけらし計執智自身に対しては、これまた、名字そのこととしても、また、諸格法という重句一身に取りてまかりおらんほどとなければなりませんまい。」

<十六>

tat kiṃ manyase śāri - putra kena  
kāraṇenāyam dharma - paryāyaḥ sarva-  
buddha-parigraho nāmocyate

「さようなことがらが、すなわち、何ごとにと、ご知曉できたまわれるや。舍利が嗣子なる方よ。これまた、何ごとのことにはあろうところの、作用によりてか、また、かような法規が絶句たらざるべからざりけらし者、すなわち、一切らが覚了されてある偏計智自身が、これまた、名号そのことにと、弁白せられるのでありましようや。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā  
kula-duhitaro vāsyā dharmā-paryāyasyā  
nāma-dheyam śroṣyanti

およそ、誰でも、舍利が孝子なりける御方よ、あるいは、部族が嫡子たりけれとも  
おかせるか、あるいは、種族という女巫涯としてもおるであろう公子がたが、また、  
かような諸律法という重句のことにおわさざるべからざりけらし御方こそなるべか  
らんとて、すなわち、名字により《負旨》されざるをえぬおおみものごとに対して  
こそ、これまた、上聞なりませることでありましょう。

teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ nāma-  
dheyam dhārayiṣyanti sarve te buddha-  
parigrhītā bhaviṣyanti avinivartan-  
īyāś ca bhaviṣyanti anuttarāyāṃ  
samyak-sambodhau |

それはともかく、また、諸々の、佛陀がた、すなわち、諸々の、具徳がたのたらま  
ほしかれと、これまた、名号により《奉旨》せられざるをえぬおおみことがらをし  
て、任適せしめこれならせるやはしれぬにもありましょうが、また、諸々の、一切  
どもとしてこそ、すなわち、さような、諸々の、宣護しておる者の覚解なりている  
仁者らのことにわたられざるべからざりける御方がたとしてこそ、御現成なりたまわ  
すことではありましょう。これまた、諸々の、離反されざるを要すべからんともおか  
れる御方がたのこととてあられたまうわけではあるけれどもであります。また、御現  
存ありたまわすやはしれぬにもありますが、これ、未央なりけらしとてあらん場、す  
なわち、正真道そのものに於てこそはまかりわたらせたまうきわにともなければあり  
ませぬ。

tasmāt tarhi śāri-putra śrad[dh]ādhvam  
pratīyatha mā kāṅkṣayatha mama ca  
teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ |

はたせるかな、舍利が嗣子たる方よ、諸浄信境という方路一身に取りて、至縁なら  
れこそはたまい、私自身をしても、これまた、仰望せしめたまわすではないか。また、

私一身のならまほしけれともかたじけのうせんところとてあそばれるはずではありま  
しょうけれども、それはともかく、諸々の、佛陀がた、すなわち、諸々の、世尊がた  
のたるべけれとこれまかりおかせんばかりともなければありますまい。

ye ke cic chāri-putra kula-putrā vā  
kula-duhitāro vā tasya bhagavato  
Smitāyusas tathāgatasya buddha-kṣetre  
citta-praṇidhānam kariṣyanti kṛtaṃ vā  
kurvanti vā sarve te Śvinivartanīyā  
bhaviṣyanty anuttarāyām samyak-sam-  
bodhau |

これまた、およそ、誰か、舍利が孝子なりける御方よ、あるいは、部累が嫡子たり  
けれともおさせるか、あるいは、部族という女巫涯としてもおるであろう公子がたが、  
また、さような具徳のことにおわさざるべからざりける御方としてはあらせられるき  
わにともしましようばかりの、すなわち、康寿が了度せられずにおる仁事のことには  
あられますところの、これまた、如来こそなるべからんとて、また、国土が覺了せ  
られてある仁事そのことに於て、すなわち、心意による志願そのことに対して、施作  
これありませることでもありましよう。

これまた、あるいは、起作なりているおおみものごとに取りてあそばせるきわに  
ともおかせねばならぬか、あるいは、御起作これなりもおわさんに、また、諸々の、  
一切たち、すなわち、さような、諸々の、退離されざるを要すべからんとあられざる  
べからざりける御方がたとしてあそばせるかでなければなりませんまい。これまた、御  
現成たまわさるやはしれぬにもありますが、また、未央たるべしとはおらねばならぬ  
ところの、すなわち、正真道そのものにこそ於てかたじけのうわたられんばかりとて  
おわしましようところでなければなりませんまいぞ。

tatra ca buddha-kṣetra upapatsyanti  
upapannā vā upapadyanti vā |

これまた、そのつどもまかりおかせられましようほどにとではありますけれども、また、佛陀という本土そのことに於て、すなわち、往生これできたまうことでありましようが、これまた、あるいは、諸々の、容生せられおかれてもあられる御方がたのこととはあそばれるところともあらねばならぬか、あるいは、また、来幸できこそたまわすかでなければなりませんまい。

tasmāt tarhi śāri-putra śrāddhaiḥ  
kula-putraiḥ kula-duhitṛbhiś ca tatra  
buddha-kṣetre citta-praṇidhir utpāday=  
itavyaḥ ||17||

はたせるかな、舍利が彌子なる方よ、信実にともこれつこうまつらんほどにいまし  
ようきわの、すなわち、諸々の、種族という孝子たち自身によりてでは、これまた、  
諸々の、族累という女巫涯そのものどもによりてもまかりおらねばならぬばかりにと  
こそではありますけれども、また、そのつど、すなわち、国土の覚解せられておる  
仁事そのことに於てでは、これまた、悲願意の思念せられておる仁境そのものも、ま  
た、起生せしめられるを要するべけんとおるのでなければなりませんぬ。」

<十七>

tad yathāpi nāma śāri-putra aham  
etarhi teṣāṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ  
evam acintya-guṇān parikīrtayāmi

「当然、のみならず、舍利が彌子たる方よ、私一身としては、むしろ、さようなこと  
がらどもそのことのことにもおわしますところの、諸々の、佛陀がた、すなわち、諸  
々の、世尊がたのならまほしけれとこそ、これまた、是の如くに、諸々の、思惟せら  
れずにすむ功德たち自身に対してではありますが、また、称宛たてまつらずもなるま  
いことにはなります。

evam eva śāri-putra mamāpi te buddhā  
bhagavanta evam acintya-guṇān pari=  
kīrtayanti |

すなわち、是の如くつかまつらんほどにともおりもうさんきわにはほかなりませぬが、舍利が彌子たる方よ、これまた、私一身のならまほしともまかりあられたまわし  
ようばかりとてわたられんところではあつても、また、さよふな、諸々の、覺了され  
あそばれておわさる方がたとしてあらせざるべからざりける御方がた、すなわち、諸  
々の、具徳がたは、これまた、是の如くに、また、諸々の、審思せられずすむ功徳  
たちに取り、すなわち、称宛あそばせおかせわけであります。

su - duṣ - karam bhagavatā śākya-muninā  
śākyādhirājena kṛtam |

これまた、妙善たらまほし者らの低廉に施作あるにたるきわにともおらんものごと  
が、また、世尊、すなわち、能仁尊が黙仙なりけらしとはおわさん御方のことにも  
あらねばならぬところにはおかれんばかりの、これまた、賢能義という御帝威に  
よりても、また、為作せられてあるところとてなければなりませぬ。

sahāyāṃ loka-dhātāv anuttarāṃ samyak-  
saṃbodhim abhisambudhya sarva-loka-  
vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ kalpa-  
kaṣāye sattva-kaṣāye drṣṭi-kaṣāya  
āyus-kaṣāye kleśa-kaṣāye ||18||

すなわち、堪忍界そのものとしてはおったはずの、これまた、世間という文界ご  
自身に於て、また、未央たらまほしともいる廷、すなわち、正真道そのものに対し、  
権現これなりたまわすや、これまた、一切という世間らの《特縁》せられるを要す  
るべけんとはいませるきわの、法律尊ご一身が、また、これ、宣通せしめられておら  
れるところにあるわけであります。

すなわち、諸代紀という渾濁そのことに於てでもかたじけのうたまわれんばかりと  
はいまさねばならなかつたところでもあるが、これまた、諸有情という穢濁自身に於  
てではあそばれますところでもあり、また、閔見儀という渾濁そのこと、すなわち、  
諸命分という穢濁一身に於ておわしたのでなければならぬが、これまた、煩惱という  
渾濁そのことに於てではまかりあられますばかりとてもおかれましようぞ。」

<十八>

tan mamāpi śāri-putra parama-duṣ-karam  
yan mayā sahāyāṃ loka-dhātāv anuttarāṃ  
samyak-sambodhim abhisambudhya sarva-  
loka-vipratyayanīyo dharmo deśitaḥ  
sattva-kaṣāye drṣṭi-kaṣāye kleśa-kaṣ-  
āya āyuṣ-kaṣāye kalpa-kaṣāye ||19||

「また、さようなことがらそのことが、すなわち、私自身のなりけりとはかたじけのうせんばかりとてもあったところではありましても、これまた、舍利が孝子たる方よ、最勝ならまほし者らが卑近に行作なすにたるところにはおらねばなりませぬのも、また、およそ私によりてこれつかまつらざるべからざりけむものごとになければなりませんまい。

すなわち、能忍土そのもののことではあるところの、これまた、世間という素界一身に於て、また、未央たるにともおらんきわの、すなわち、正真道そのものにと、これ、権現はたしましてこそ、これまた、一切らという世間が〈個縁〉されるを要すべからんとはいまいしょうところの、法理智自身も、また、宣通せしめられてはあるところでもなければありませぬ。

すなわち、剛決という穢濁一身に於てこれつかまつらんほどとはおらねばならぬきわにともいるが、これまた、諸管見儀という渾濁そのことに於てではあらんところでもあり、また、諸煩惱という穢濁自身、すなわち、寿命という渾濁そのことに於ておるのではありますが、これまた、当期という穢濁一身に於てまかりおりもうさんほどにとこそなければなりませんまいぞ。」

<十九>

idam avocad bhagavān āttamanāḥ āyuṣmān  
[s] āri-putras te ca bhikṣavas te ca bodhi-  
sattvāḥ sa-deva-mānuṣāsura-gandharvaś ca  
loko bhagavato bhāṣitaṃ abhyanandan ||20||

かようなことからそのことに取りて、また、弁説これあそばせておわしたのも、具徳にはあられました。

心意快善にともこれまかりいませるばかりの、具寿、すなわち、舍利という御嫡子ご自身〈サーリプトラ〉が。それはともかく、これまた、諸々の、乞士たち一身らも、また。それはともかく、諸々の、菩提という有情たち自身こそが、すなわち、過半、天神なりけらし諸人智という非神妙が中有たるべしともおらんきわのではあるけれども、これまた、世間として、また、これ、世尊の方からかたじけのういたさんばかりとて、すなわち、宣説なりたもうてあそばせる御方に対し、これまた、信受奉行もうしあげましたことではあった。

<二十>

sukhāvati vyūho nāma

mahā-yāna-sūtram ||

また、安楽という近畿圏そのものことでもあるところの、

浄嚴智一身、すなわち、名字そのこと

としてはおらねばならぬのも、これまた、

大いからまほしけるものごとどもによる往趣（わ 大尋的往趣 や 大往趣）

という経緯そのことであるところでなければならぬ。

以上、南都小塔院住職河村俊英訳、梵本阿弥陀経、漢訳仏典語編、終。